

価値と価値づけの理論的検討

ーコンヴァンション経済学における展開ー

立見 淳哉^a・山本 泰三^b

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| I はじめにーコンヴァンション経済学と価値／
価値づけへの視座ー | IV 価値づけと搾取ー労働価値から（諸）価値の
空間へー |
| II 価値づけと価値論 | V おわりに |
| III 価値づけの権力 | |

摘要

本稿では、コンヴァンション経済学における価値づけというテーマの展開を明らかにするべく、価値づけ論の概念的要約、価値論の検討、価値づけの権力という概念の導入、搾取概念の再定義について整理をおこなった。コンヴァンション経済学の観点から価値づけの基本的な契機をまとめると以下の3点になる。1. 価値とは価値づけの作業の結果であるが、その作業は、一般的に共有される基準を具体的状況において引照し、解釈し、利用してなされる実践である。2. 複数の価値基準が存在する。3. 経済的価値と規範的諸価値という分断は棄却される。コンヴァンション経済学はアクターが有する政治的能力を強調することで、コーディネーション概念を（価値）判断のコーディネーションへと拡張し、規範的な意味での諸価値に重要な位置づけを与える。そしてこのことを通じて、価値基準の制定および諸物の価値づけをめぐる権力の所在（「価値づけの権力」）や、労働・分配の問題（搾取）といった政治経済学的な論点を分析の俎上に載せる。そこでは、搾取は、客観的価値の計算の論理的帰結ではなく、まさにアクターの政治的能力がかかわる正当化や批判の言語として再定義され、また価値づけの権力の問題として捉え直されることになるのである。

I はじめにーコンヴァンション経済学と価値／価値づけへの視座ー

本稿の目的は、コンヴァンション経済学の諸議論を整理し、価値と価値づけの概念について理論的な検討を行うことである。これを通じて、とりわけ、その政治経済学的な含意を明

らかにする。

コンヴァンション経済学は、1980年代以降にフランス社会科学の新潮流とともに形成されてきた、制度の経済学の一派である。コンヴァンション経済学は、当初は方法論的個人主義に非常に近い立場から出発し、その後、リュック・ボルタンスキーやロラン・テヴノらのプラグマティック社会学との密接な関連の中で、「複雑なプラグマティズム的状況主義」(Diaz-Bone 2011) と呼ばれるような独自の議論を展開している。^{コンヴァンション}慣行概念をめぐって、経済学者が中心となり、哲学、認知科学、社会学といった様々な学問分野間の知的交流の中で“コンヴァンション理論”は形成されてきた。このような経緯を持つことから、その研究プログラムを一口で要約するのは容易ではないが、経済調整において規範的な価値の果たす役割を重視し、市場交換に先立つ財や人の質的規定 qualification の過程にフォーカスする点に大きな特徴があったといつてよい。

学派としてのコンヴァンション経済学の登場は、1989年に出された *Revue économique* 誌の「コンヴァンション経済学」特集号に遡る。ここでの共同マニフェストに示されているように、当初は、アクター間の意図のコーディネーション(調整)における慣行の役割が強調されていた(コーディネーション問題の解決)¹⁾。ここにはのちに続く論点が含まれているのだが、それでもこの時期の研究は「明らかに方法論的個人主義の内部に位置付けられる」(Favereau 2018, p.122)のものであった。ファヴローが言うように、標準的な経済学理論の内側からその限界を精査するという方策が採られたとみてよいだろう。

コンヴァンション経済学は、その後1990年代を通じて、限定合理性の議論を拡張し、分散認知論 distributed cognition を取り込んだ認知論的な考察を深める一方(これに伴い、認知の主体は個人から人間・非人間からなる装置 dispositif / 配置 agencement ^{ディスポジティブ}あるいはフォーマット化された状況へと移行する)、コーディネーションの問題に(規範的な意味での)価値を明示的に導入することで、人々の批判や価値判断の能力を考慮し、人やモノの質的規定をめぐるコンフリクトとその調停を主題化していった(パティフリエ編 2006, 立見 2019)。なかでもボルタンスキーとテヴノ『正当化の理論』(1991 = 2007)が価値の導入において大きな足がかりを提供した。その結果、コンヴァンション経済学は、コーディネーションの概念を拡張させ、「行動に関する判断のコーディネーションを抜きにして、(経済)

1) ジャン・ピエール・デュピュイ、フランソワ・エイマール・デュヴルネ、オリビエ・ファヴロー、ロベール・サレ、ロラン・テヴノといったコンヴァンション経済学の創始者たちによる共同マニフェストでは、次のような言葉で基本的認識が表現されている。すなわち、「市場交換の契約に限られるときでさえ、諸個人間の合意は共通の枠組みなしには、あるいは構成的慣行を抜きにして不可能である」(Dupuy et al. 1989, p.142)。すなわち、ここでは互いに分離した個人が不確実性に満ちた状況下でいかにして互いの意図を調整(コーディネーション)することができるのかが問われており、彼らは、ゲーム理論を参照しながら(相互期待の無限後退など)純粋な合理性の限界を示した上で、アクター間のコーディネーションには、規則を際立たせるような調整の目印 repère となる外的な事物と、解釈の支えになる慣行の存在が不可欠であることを主張している。なお、構成的慣行とは慣行と呼ばれる規則のうち、状況や規則を解釈することを可能にするような規則である。それは意識を調整する規則であり、集合表象や共有信念を含むものである。評価モデル、シテ Cité といった概念に対応する慣行である。

行動のコーディネーションは存在しない」(Favereau 2018, p.122)との主張に至る。

ファヴローによると、さらに、1990年代後半以降、とりわけボルタンスキーとシャペロ『資本主義の新たな精神』(1999 = 2013a, b)を経て、コンヴァンション経済学はこれまで言及してこなかった資本主義というテーマを俎上に載せ、方法論的全体論(ホーリズム、「マクロ」)との結びつきの強い再生産の問題を議論するようになる。コンヴァンション経済学は、今日、コーディネーション(方法論的個人主義)と再生産(ホーリズム)を架橋する地点に自らを位置づけようとしているように思われるが、その鍵となるのが価値の経済分析への再統合である。

特にコンヴァンション経済学が重視するのは規範的な意味での価値であり、これは経済学の伝統の中で、新古典派経済学においてもマルクス経済学においても退けられてきたものであるとされる。前者はコーディネーションを、後者は再生産を強調し、そこには非常に大きな分断があると通常は考えられている。しかしながら、それらはいくつかの点で共通の特徴を有している。それは一つには、合理性が所与のものとして独立に定義されていることであり、そしてもう一つが倫理的な(諸)価値が一切排除されていることである。ファヴローによれば、コーディネーション/再生産、合理性、(諸)価値の間の分断が問題であり、コンヴァンション経済学は、規範的な(諸)価値の導入を通じてこれら3つの要素を再結合し、コーディネーションと再生産を和解させようとしてきたのである。

そして、2000年代以降、こうした研究プログラムの変化あるいは豊富化の中でフォーカスされてきたのが、価値 values と価値づけ valuation をめぐる主題である。通常、経済学者が価値と呼ぶものは、規範的要素を取り除いた後に残るもの、すなわち商品財/サービスの相対価格である。そして、新古典派経済学もマルクス経済学もいずれも——効用・価値であれ労働価値であれ——、価値とは客観的な大きさ grandeur (=量)であり、アクターにとっては外的に決められる自然な事実であると考えられる。しかしコンヴァンション経済学にとっては、これは幻想に他ならず、価値は(批判と価値判断の能力を付与された)当のアクターたちの評価を通じて構築されるものである(オルレアン 2011 = 2013)。したがって、価値づけと呼ばれる、価値の構築の実践的な過程こそが問題となる。

価値づけへの着目は、特にこの10年間で、オルレアン(2013)、エイマール-デュヴルネ(Eymard-Duvernay 2016)、ファヴロー(Favereau 2014)らコンヴァンション経済学の創始者たちによって、また Boltanski et Esquerre(2017)などプラグマティック社会学の論者によって提起されてきた。ここにベッシー・ショーヴァン(2013 = 2018)など、市場的媒介者の権力をめぐる考察を加えることもできよう。

コンヴァンション経済学の議論において、価値づけは、質的規定に関する考察の延長線上にあると言って良い。それは、「質の慣行」を参照しながら(Eymard-Duvernay 1989)、財や人など存在物の性質を定め、コーディネーションを可能にする共通の計算空間を創出する(あるいは市場を構築する)操作であり、コンヴァンション経済学の中心的な関心を占め

てきた。「秩序、分類、社会的ヒエラルキーを確立する」制度の役割（エイマール-デュヴルネ 2006, p.77）を、質的規定として論点化してきたとも言えよう。そしてコンヴァンション経済学において、価値づけの活動、すなわち価値（＝質）を評価し価値付与することは、質的規定の過程に等しい。ベッシーとショーヴァンが述べるように、価値はプラグマティックに構築されるもので、それは「（価格や美的価値、評判、ステータスといった）多様な形態をとることができ、特定の状況の下で、特定の帰結を伴う出来事や状況、事物、組織、人物に付与された“質 quality”」を指す（Bessy and Chauvin 2013, p. 84）²⁾。それではなぜ、質的規定とは別に、価値と価値づけを改めて強調する必要があるのだろうか。

これには、一つには、前述したように、規範的な意味での価値を経済分析に導入することで、コーディネーション（方法論的個人主義）と再生産（ホーリズム）をつなぐことを明確に意識するようになったことが関係していよう。加えて、その要因でもあるが、コンヴァンション経済学が、2000年代以降、資本主義、権力、搾取といった政治経済学的なトピックへと向かうようになったことが影響していると考えられる。しかし、価値づけの視座は、権力や搾取といったテーマとどのように接続されるのであろうか。本稿は、コンヴァンション経済学の研究プログラムに基づき、価値づけ研究の射程、とりわけ、その政治経済学的な側面や企図を明らかにする。

以下ではまず、Ⅱにおいて価値と価値づけについて整理する。価値づけ研究の視座を概観した後で、オルレアンによる経済学における価値論の検討をとりあげ、価値論の乗り越えを図る上での価値づけの着目の意義を示す。そしてⅢでは、エイマール-デュヴルネの考察に従って、何に価値があるかを示す権力として価値づけの権力をめぐる論点を明らかにする。さらに、Ⅳにおいて、ファヴロー論文を軸に、価値づけ論を踏まえて、搾取概念のコンヴァンショナリストの再定義について検討し、コンヴァンショナリストが提起する価値と価格の関係を示す。

Ⅱ 価値づけと価値論

1 価値から価値づけへ

近年の価値づけ研究は具体的な事例の分析が主となっているが、Heinich（2020）は主にコンヴァンション経済学やANTの枠組みなどに依拠しながら価値づけというテーマの理論的・概念的な整理をおこなっている。それを一言でまとめるなら、「価値から価値づけへ」というテーゼになるだろう。これは、アクターが事物に価値を与える行為・過程に焦点を合わせることを意味している。すなわち価値は価値づけの過程の所産として捉えられることになる（その過程についての経験的研究を積み重ねてきたのが、これまでの価値づけ研究だと

2) ボルトンスキーとエスケレもまた価値の本質主義的な定義を否定するが、彼らにとって、価値とは、価格を批判もしくは正当化する上での論拠を提供するものである（Boltanski et Esquerre 2017）。

いえる)。このプロセスをHeinichは質的規定 qualification (および requalification) とも言いかえているのだが、これをコンヴァンション経済学に由来する概念として説明している。価値は所与のものではなく、つねに再創出される。とはいえ、それが個人の自由な創意によるものではないことは言うまでもないだろう。価値づけは心理的な次元の事象ではなく、むしろ制度的なフレームワークのもとでなされる集合的な行為・活動である。また価値づけ研究は価値づけプロセスにおける主体および客体だけでなく、価値づけがなされる実際の状況や文脈を重視する。

それゆえに価値づけという問題設定においては、価値は内在的なものか外在的なものかという対立は退けられる。価値は、事物のアフォーダンス、表象、および社会関係の組み合わせによって生み出されるとHeinichは主張する。価値は事実か幻想かという対立の構図も同様に無効となる。むしろ価値は、共有された表象なのである。ただしそれはたんに精神的なものだけではなく、行為のフレームとの節合こそが分析のポイントとなるのであり、だからこそ価値を規範に還元するべきではない。規範は、価値を正当化する基準として価値づけに関わっている。価格と価値の関係も問題となってくるが、測定(尺度)・愛着・判断といった価値づけの様相を見定めることによって、価格を諸価値の中で位置づけなおすことが可能になるだろう。また、価値を利害関心に還元することはできず、公的な価値と私的な価値の差異が識別されるべきである。以上の議論は、価値の複数性を重要な前提としている。かくしてHeinich (2020) は、経済的価値と社会的諸価値の分断を放棄し、価値づけの一般モデルを構想しているのである。

Heinich (2020) による概観をふまえ、コンヴァンション経済学の観点から価値づけの基本的な契機をまとめるとすれば、以下の3点になるだろう(山本 2021)。1. 価値とは価値づけの作業の結果であるが、その作業は、一般的に共有される基準を具体的状況において引照し、解釈し、利用してなされる実践である。2. 複数の価値基準が存在する(それらは、対立することも、妥協的に組み合わせられることもありうる)。3. 経済的価値と社会的諸価値という分断は棄却される。

2 価値の実体仮説の検討

Heinich (2020) は、オルレアン (2013) を参照しつつ、経済学における価値論は内在説であるとする。しかしながらこの点についてはHeinichの議論は十分ではないため、オルレアンによる価値論の検討をここでふり返っておく必要があるだろう。

ふつう、価値とは人間によって「判断されるもの」である。ところが、「経済学の伝統の中で扱われてきた価値は、諸主体の上にある、および諸主体間の上にある客観的で計算可能な量として現れる」(オルレアン 2013, p.50)。この、経済学におけるいわゆる「価値論」を、オルレアンは「価値の実体仮説」と呼ぶ。「価値論においては、経済的価値の客観性は、量を測定することの可能な社会的実体——労働または効用——が存在することに帰せ

られる」(p.178)。効用価値説も労働価値説もこの点では同一の視角を共有している。古典派～マルクス派の労働価値説を価値の実体仮説として捉えることについてはさほど説明を要しないだろう³⁾。小麦と鉄が交換されるのだとすれば、それは両者に共通の何かがあるからだとマルクスは言う（使用価値は互いに異なるのだから、価値の論究にあたっては捨象されなければならない）。労働生産物であるということがそれであって、ゆえに価値の実体は労働であり、その尺度は労働時間であるとされる。一方、新古典派の価値論としてオルレアンが詳細に論じるのはワルラスである⁴⁾。ワルラスにあっては個人の主観的な選好に効用の客観性が結びつけられるので、古典派に比べるともう少し複雑な説明を要するが、選好が外生的だと仮定されるなら、それは生産関数と形式的には大差ないものになるとみなせる。ワルラスによれば社会的富とは、稀少性を意味し、すなわちそれは、われわれにとって効用があり、限られた量しかない物のことである。この稀少性が事物に価値を授けることで、交換の基礎が与えられる。そして均衡状態において、価値の比率は稀少性の比率に等しいことが証明される。

価値の実体仮説は何を意味しているのか。それはオルレアンによれば、以下のような問いへの答えなのである。商品経済あるいは市場経済において、生産者であり交換者でもある諸個人はバラバラに行動し、しかしながら物質的には相互依存している。なぜ、いかにして、混沌と解体ではなく、秩序がそこに存在できるのか？商品そのものの中に価値があり、それが諸商品の通約可能性を基礎づけているがゆえに、商品は互いに交換されるのであり、そしてそこには市場の秩序を成立させる最適な交換比率（自然価格、公正価格）があるからだ——それを証明することが一般均衡論の課題であった。だからこそ、経済学において「交換を考える上で適切なやり方は、貨幣的取引の外観を乗り越え、論理的に取引に先行し取引を組織化している隠れた量の存在を析出すること」(p.24)となるのである。そこから、市場取引の基本を物々交換とみなすこと、相対価格として価値を捉えることといった、経済理論の独特で奇妙な特徴が出てくる。

この価値論は、結果として、多彩なケースの分析やその手法・さまざまなツールを生み出す理論的ベンチマークとなったといえるかもしれない。しかしそれは同時に、「現実の取引

3) もっとも、オルレアンはマルクスの理論を実体仮説でしかないものとしてまるごと切り捨てるわけではない。オルレアンはルービンのマルクス解釈などを参照し、物神性の概念が価値の社会的・歴史的な性格を捉えるものであること、だがそれが価値の実体という観念と矛盾する可能性を指摘している。また、オルレアンの価値論批判の主旨を汲んだうえで、生産の政治経済学的分析で強みを持つ古典派価値論（マルクスの労働価値説を含む）の意義があらためて検討されるべきであるように思われる。マルクス経済学における様々な論争についてはハワード＝キング（1997, 1998）を参照。

4) ワルラスの理論的構想を標準的な経済学の代表として扱うことに対しては、とりわけ現代の経済学の状況においては当然ながら批判がありうる（経済学の現代的動向については瀧澤（2018）を参照）。その点についてオルレアンは自覚的であり、たとえば実験経済学などのアプローチの発展が無視されているわけではない。経済理論とは分析手法の工具箱であるという見方が支配的であることをふまえて、しかしながら概念的枠組み（あるいは「ヴィジョン」）としての意味は問われうるし、問われなければならない、というのがオルレアンの方法論的な立場であろう。

とそれが展開する仕方に対する軽視」(p.31), および, 貨幣を副次的なものとして扱う, という重大な瑕疵を不可避的に伴うものであった。前者の問題について言えば, あの「競売人」に象徴されるワルラスの極めて集権的なモデルによる市場は, 「外生的な個人的欲望を歪めることなく記録することを機能とする, 絶対的に中立的な自動的メカニズム」であり (p.65), 「このメカニズムは, 本当の表現を攪乱するであろう有害な影響をすべて排除することを前提とする」(p.63)。そのため, 市場における主体はただ商品のみと向き合い, 他人には「まったく無関心」であり, 他人の選好や消費からはまったく影響を受けないと想定される。個人の選好は完全に外在的である。この枠組みにおいては, 例えばヴェブレンが論じたようなタイプの消費行動を分析することは明らかに不可能である。

また, 選好の外在性は, ベネッティとカルトゥリエのいう「財の目録(ノマンクラチュール)仮説」を前提とする。すなわち, すべての財(商品)は完全に定義され, それぞれ品質は同質であり, かつそれらすべてが市場参加者全員に知られていると仮定されている。ゆえにワルラス的主体は, 厳密に功利主義的な個人として, 価格と数量のみに反応する「パラメータ型合理性」にもとづき行動することになるわけである。言いかえるならば, 価値の実体仮説は「使用価値」を捨象する。実はこの点に, コンヴァンション経済学がなした貢献がかかわってくる。「ワルラス的な主体が相互に分断され, 集合表象を持たず, 価格変数の下で物の領有にもっぱら関心を持つように見えるとすれば, それは, それ以前に彼らが諸物の質や諸物の定義に関して合意しているからにはほかならない」(p.85)。オルレアンは非対称情報の概念にもとづく諸研究を参照しつつ, 質の慣行こそが市場取引を可能にするというコンヴァンション経済学の重要な知見をここで強調するのである。

オルレアンの検討を要約すれば, 価値論あるいは「価値の実体」仮説は, 以下のような意味を持っていた。それは価値の客観性を支え, また同時に公正価格の問題を導き, それが市場の秩序を保証する, ということである。だがそれは, 現実の経済における諸価値の問題を分析することを可能にするものではなかった。商品経済を成り立たせる経済的な価値の客観性に関しては, オルレアンはむしろ貨幣という制度, 貨幣の客観性こそがその役割を担っていると論じる⁵⁾。また, R. ジラールの模倣仮説を援用することによって, 個人の行動についての一般性の高いモデルを示し, 「使用価値もまた社会的な産物」であることを説明する。オルレアンの価値論批判は, 価値づけ研究にとっての礎石の一つとなっている。その企図は, 以下の文言によく表現されているだろう。「人は個人的意志のみに従うのではない [...]。経済活動には, 何を行えばよいかを諸個人に指示する集合的な力も作用する」(p.303)。「価格規定における交換装置や力関係の役割を指摘することによって, われわれのアプローチは, 関係に対する量の絶対的優位という考え方とは断絶することになる」(p.14)。

5) オルレアンの議論についての叙述としては不十分になるのだが, 彼の貨幣・金融論については本稿ではふれない。ジラールにもとづく模倣理論は興味深い, 他のコンヴァンションナリストの議論との関係という観点からも検討すべきであろう。

III 価値づけの権力

価値づけのプロセスにはあらゆるアクターが関与する可能性があり、またそれはつねに価値の「再創出」であるだろう。とはいえ、当然のことであるが、それは無定形な変化の流れを意味しているのではなく、暫定的であるにせよ何らかの価値がプロセスの節目で固定されるのであり、かつそれは制度的フレームワークのもとでの、社会関係の作用の帰結なのであった（エイマール-デュヴルネ 2006）。そこには非対称な力の行使がある。すなわち、価値づけの権力という問題をコンヴァンション経済学は提起するのである。それは端的に言えば、諸物の価値を決定する力である（Eymard-Duvernay 2016）。

この力を指し示す概念として「権力」という語はやや強すぎると感じられるかもしれないが、コンヴァンション経済学が政治経済学として諸価値の政治的次元を直視しようとすることをふまえるなら、むしろ自然な語法であろう。とりわけエイマール-デュヴルネは、価値づけを経済民主主義の問題として議論している。この権力は、人々の間、諸装置の間で、局所的に配分されている。たとえば Thévenot (2016) がいうように、企業の組織構造を“装備”された経営者の権力、金融市場にもとづく株主の権力、財市場にもとづく消費者の権力、労働法などにもとづく労働者の権力、などを考えることができる。ともあれ、「価値づけ」をなす「力」というものの特質を理解するためには、ひとまずベッシー＝ショーヴァン（2013＝2018）による市場媒介者の権力についての研究を参照するのがよいだろう。その後、あらためてエイマール-デュヴルネの議論に立ち返ることにする。

1 市場媒介者の権力

オルレアンが検討したようなワルラスの市場観の限定性を鑑みれば、市場取引の諸相をより具体的に把握することの必要性は明らかであるが、その際にさまざまなタイプの媒介者の役割を看過することはできない。もちろん生産者や消費者も価値づけをおこなうのだが、価値づけが諸契機の連鎖によってなされ、それゆえに個々の過程と過程をつなげること（典型的には、需要と供給の仲介）に存しているのだとすれば、その結合を担う媒介者は特別な位置を占めているといってよい。これまでの経済学的发展においては、媒介者は情報探索費用などの取引費用を削減することで市場機能の不十分さを補うという役割によって位置づけられてきた。また、その位置を利用して媒介者は自己利益のために戦略的にふるまうことができるだろう。だがベッシー＝ショーヴァンは、媒介者はそこにとどまらず、財・人々・組織を秩序づける認知的カテゴリーの定義に関与し、価値づけのダイナミズムに影響を及ぼすことを明らかにしているのである（表1）。

媒介者は、「流通業者」、「マッチメーカー」、「コンサルタント」、「評価者」という4つのタイプがある。彼らは、質の慣行にかかわる価値づけフレームを使用し、普及させ、またそれらを修正あるいは創出する。もちろん、すべての媒介者が強い力を有するわけではない。

表1 価値づけの諸種の媒介者

媒介者のタイプ 価値づけ フレームの特徴	流通業者	マッチメーカー	コンサルタント	評価者	
定義	分散的	小売業、テキスタイルの生産者	求人会社、タレント会社	求人コンサルタント	金融格付け
	集中的	特定のアートディーラー	モデル会社	ワイン造りのコンサルタント	影響力あるワイン批評家
時間制	長期	大量流通	スキルの論理	俸給表	ワインの公式分類
	短期	テキスタイル / ファッションのトレンド	オリジナルなルックス	トレンド品	短期のコンヴァンション、インターネットバブル
一般性	標準	大量流通	スキルの論理	俸給表	金融市場
	特異	アートディーラー	ヘッドハンター	技術コンサルタント	建築コンペ

出典：Bessy and Chauvin (2013) より。

価値づけフレームの性格に応じて、媒介者の価値づけ権力の差異と強さが示される。まず、価値づけフレームの定義における、集中的／分散的という軸。次にフレームの一般性における、標準的／特異的。そして時間性における、短期／長期、である。これらの組み合わせから、以下の2つの定型的な布置を見出せる。すなわち、安定した標準的フレームと強力な媒介者、および、交渉される特異なフレームとさほど強力ではない媒介者、である。

2 政治的能力と価値づけ

エイマール・デュヴルネ (Eymard-Duvernay 2016) は、コンヴァンション経済学への入り口として、限定合理性を突き詰めていく認知論的な議論と、コーディネーションに規範的な諸価値を導入する倫理的な議論があるとする。そして、諸価値を導入する二つ目の入口が、古典派経済学との再接続を可能にし、政治経済学的重要争点を活性化させるのだとする。価値づけの権力という概念の提起によって、その「公正な配分およびこの権力の民主的行使」を問うことが可能になるのだが (p.291)、エイマール・デュヴルネは以下のようなアクターの政治的能力の諸段階を描くことによってこの問題にアプローチしている。

段階0は、ヒエラルキーあるいはルーティンへの服従である。賃労働関係において権利を認められない労働者はこの状態にある。段階1は、計算するアクターである。それは一貫した合理的選択を行うが、それゆえに倫理的次元を欠く。段階2は、選択について反省するアクターである。そこには一次の欲望のみならず二次の欲望（一次の特定の欲望を持つことを望む、あるいは望まないこと）があり、選好についての熟慮がなされる。つまり諸価値を認め、価値について議論することができるのである。段階3は集団的行為である。アクターは共通の価値について調整しあうのだが、これは社会的 - 技術的 - 経済的な諸装置の支えによって可能になる。段階4は、共通善に関する反省を行うアクターである。この段階では、法の言語が重要な装備となる。

価値づけの過程は、主にこれらの段階における上層の能力がかかわっている。金融化の高まりのように、市場や資本主義がもっぱら計算へと縮減されることは、大部分の市民が計算

能力へと縮減される、いわばパラメータ型合理性のみに従い行動するようになることにつながる。それは少数の手のうちに価値づけの権力を集中させてしまうが（ここで媒介者としてのプラットフォーム資本も想起されよう（山本 2021)), そのような経済は反民主主義的なものとなる、とエイマール・デュヴルネは警鐘を鳴らしている。いずれにせよ、アクターの政治的能力も、媒介者の力も、さまざまな認知的カテゴリ化、人工物、制度やルールなど、一言でいえば諸装置とその配置のもとでのみ発揮される。こうして、資本主義経済システムは「価値づけ権力のアーキテクチャ」（Thévenot 2016）としても捉えることができるであろう。

IV 価値づけと搾取－労働価値から（諸）価値の空間へ－

コンヴァンション経済学は、価値づけという主題を探求する中で、さらに、これまでほとんど触れられることのなかったマルクスへの言及を行うようになる。この章では、コンヴァンション経済学の政治経済学的な展開の一つとして、搾取概念との関係を中心に検討する。コンヴァンショナリストは、マルクス主義の伝統と密接に関連する搾取という概念を独自に再定義している。検討を進めるにあたって主として参照するのは、オリビエ・ファヴローの論考「価値、搾取、そしてコンヴァンション経済学」（Favereau, O. (2018) . « Valeur(s), Exploitation et Économie des Conventions »)である。ここでのファヴローの議論は、ベッシー＝ファヴロー（2011, 2012）においてすでに提示されていたアイデアを発展させたものと考えることができる。

1 マルクスにおける価値と搾取

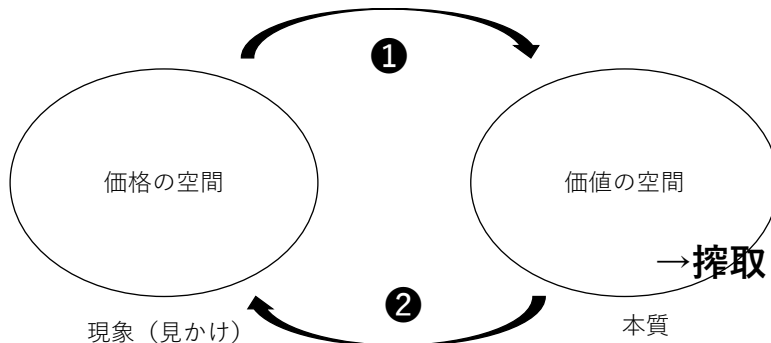
ファヴローによると、コンヴァンション経済学では、初期の研究において賃労働関係の慣行を扱うロベール・サレ（Salais 1989）がマルクス主義の伝統と一定の関係を有していたのを除けば、マルクスとの関係はおぼろげであった⁶⁾。当初は資本主義という言葉ですら、方法的個人主義との関係が強かったコンヴァンション経済学で用いられるボキャブラリーには含まれていなかったのである。しかし、ボルタンスキーとシャペロ『資本主義の新たな精神』（1999 = 2013a, b）によって転機がもたらされる。ボルタンスキーとシャペロは、資本主義の再生産と変容というホーリズムと強く結びついてきたテーマを、行為者の批判と正当化

6) この他、ファヴローは、「ずいぶん控えめではあるが」と断りを入れつつ、アンドレ・オルレアン・ロベール・ボワイエとの共同研究を挙げている（cf. 1991, 1994）。また、資本論における慣行の扱いについて議論を展開している（一つは単純労働と複雑な労働の間にある諸価値のヒエラルキーにかかわるもので、もう一つが生産価格における一般的利潤率の水準に関わる説明である）エドゥアル・プーランの一連の著作を挙げる（たとえば Poulain(1992)。同様に、Segura(1995)も参照している）。ただし、それは重要な考察ではあるが、マルクスのプロジェクトとコンヴァンショナリストのプロジェクトを結びつけるものではないとしている。

の論理から再構成する道を示し、その中で、搾取についても再定義を行なっている。

ボルタンスキーらの定義に入る前に、まずは、ファヴローに沿って、伝統的な搾取の理解、すなわちマルクスによる搾取の定義について確認することにしよう。なお、ファヴローは、マルクスの企図を読み解く最も重要なキーワードとして搾取概念を位置付けている。「疎外よりもむしろ搾取をマルクスのプロジェクトの中心に据えることで、私は、1844年の「草稿」の若きマルクスに対して、円熟期の、つまり「資本論」のマルクスを選ぶ」、のである(p.120)⁷⁾。ファヴローはまず、マルクスが賃労働の搾取が利潤の源泉であることを論証する上で、二つの尺度／分析空間の区別が前提にされていることを示す。すなわちそれは、「価格の空間」と、(マルクスにおいては労働価値に限定されている)「価値の空間」である(図1)。このうち、人間が生存し、思考し、行為するのは、価格タームでの尺度空間(価格の空間)である。しかしながら、この空間は、ヘーゲル哲学の術語に従えば「見かけ appearances」、現象にすぎず、価値の「本質」に至るものではない。マルクスはそこで「価値の空間」として、科学的研究にふさわしいとされる尺度の空間、すなわち抽象的労働時間の空間を構築する。

マルクスの議論において、等価物の交換から利潤の生成を可能にする鍵は、労働力商品に



凡例

- ①：「見かけ」の世界の抽象化と、科学的(客観的)分析に適した新しい尺度空間の構築
- ②：「見かけ」の世界に立ち戻り、(平均利潤率での生産価格を含む、価格としての価値の変化について)予測を行う

図1 マルクスにおける二つの尺度空間

出典：Favereau, 2019, « Valeur(s) », exploitation et économie des conventions, presented in Journée « Etat prédateur, conflits et résistance » MSH Paris-Nord.

7) ファヴローはマルクスの「搾取」とコンヴァンション経済学の「正当化」を結びつけるのだが、本来それらは互いに調和するカテゴリーではないとする。搾取は構造理論に属し、正当化は行為者の理論に属するからである。マルクスの読み方に関して、最も構造主義的なもの(アルチュセールとバリバル)から最も現象学的なもの(ミシェル・アンリ)まで様々なヴァリエーションが提起されてきたが、コンヴァンショナリストの試みは、搾取の概念を後者の軸へとずらそうとするものだとしている。だがそこに解消されるわけではなく、ファヴローはその中間的な立場をとり、ボルタンスキーとエスケレ(Boltanski et Esquerre 2017)の「プラグマティックな構造主義」との関連で搾取を定義する。

ある。労働力は、それ自身の価値以上の価値を創造する奇妙な特性を備えた、特殊な商品である。労働力は、雇用主によってその価値どおりに購入される。労働力の価値は、労働力の再生産に必要な消費財のバスケットに含まれる抽象的労働時間数として客観的に決定される。仮にそれが8時間に相当し、他方で労働者の1日の労働が10時間であるとすると、1日の労働は、2時間の剰余価値を生じさせることになる。それこそが、賃労働者によって提供され、雇用主によって領有されるところの無償労働に他ならない。

ところがこの無償労働は、雇用主および賃労働者の認識 perception からはこぼれ落ちてしまうという。なぜなら雇用主と賃労働者の認識は、「本質の世界」（価値の空間）ではなく、「見かけの世界」（価格の空間）に依拠しているからである。「見かけの世界」において、標準的な雇用主は標準的な賃労働者に対して、標準的な労働日に対応するところの、貨幣で表現される標準的な日当の賃金（他の至る所で提示されるもの）を支払う。ゆえに「価格の空間」においては、賃労働者がより多くの賃金を望んだとしても、交換の論理は「厳密に正確」である。しかし、交換を価値の空間に持ち込んだ途端に、それはまったくそうではなくなる。マルクスは、賃金を抽象的労働時間へと翻訳することで、「不可視の無償労働」という現象を可視化し、利潤の源泉とその尺度を明らかにするのである。

このことから、ファヴローは搾取について次のように結論づける。すなわち、マルクスにおける搾取とは、具体的には、人々にとって不可視の状態に置かれた、しかし現実中存在する無報酬労働時間である。そしてそれは、「盗みではなく、労働市場において、[...] 労働力とその価値どおりに交換可能な商品の状態に還元されたことの論理的な帰結」(p.127)である。マルクスの論法は非常に巧みであり、それは①利潤の源泉に関する科学的説明、②利潤の大きさの客観的な尺度、そして③利潤に内在する不正義の倫理的告発を、同時に提供してくれるのである。

しかしながら、ファヴローは、マルクスの論法の有効性をめぐる疑問⁸⁾とはまた別に、とりわけ第3点目に関して、価値の空間および利潤の源泉がマルクス経済学者の博識な眼にしか見えないものとなっていることを問題にする。ここでいう搾取は、理論上、当事者の意識や個別の具体的な状況とは無関係に決定される客観的かつ量的な事象として定義されているといえるだろう。マルクスは上記の手続きにおいて、倫理ではなく科学を作っているのだが、それによって暴かれるのは明らかに非倫理的なものである。したがって読者は基本的に自身の責任で倫理的判断を下さなくてはならない。ただし、「マルクスは、読者が完全に理解しきれなかった場合に、普段使わないような明らかに倫理的含意を帯びた用語を選んだ。それが「搾取」である」(p.128)。

ここでコンヴァンション経済学の観点から争点となるのは、経済学的な意味での価値と、規範的意味での価値の間の断絶である。マルクスの倫理的価値を排除した分析枠組みにおい

8) 一般的なマルクス経済学による搾取の議論が、オルレアンによって批判された価値の実体仮説(Ⅱ-2)に強く依拠するものであることは言うまでもないだろう。また、注3も参照。

て——それは価値や正義を労働時間での客観的価値の計算へと制限する方法論である——、資本主義システムの根底にある不正義や不可視の無償労働の搾取を適切に扱うことが困難であることが、1世紀半に及ぶ努力の末に明らかになっている、とファヴローは考える。「マルクスのプロジェクトは、その労働価値論によって裏切られたとは言わないまでも、妨げられてきた」(p.128)。

これに対しファヴローは、正義／不正義といった諸変数を理論の内部に統合することを可能にするような、労働価値論とは別の方法論を探求することで、マルクスの企図を引き継ぐことができる、と述べる。それがコンヴァンション経済学の研究プログラムであり、倫理的価値を取り込んだ新たな尺度空間を提起し、行為する人々の告発として搾取を捉えなおすものである。そこでは、人間はホモエコノミカスのような単なる計算機械ではなく、規範的判断を含む高次の政治的能力を有する。

2 ボルトンスキーとシャペロによる搾取概念の再評価

コンヴァンション経済学においては、構成的慣行、評価モデル、共通の上位原則など、さまざまな用語で諸価値の空間が提起されてきた。なかでも、ボルトンスキーとテヴノ(1991)、ボルトンスキーとシャペロ(1999 = 2013a, b)の「シテ」概念が、倫理的規範や道徳をもちや排除しないような諸価値の空間に関する体系だった論理を提供している。それは、内的に首尾一貫した正義と偉大さの原理・基準(共通善)を備え、人々の批判と正当化の支えとなるような規範的価値の空間である。

ボルトンスキーとシャペロにおいては、搾取もまた、シテと正当化の論理から理解される。ファヴローは次の文章を引用し、シテに基づく正当化と対をなすような批判として搾取が定義されることを強調する。

実際に搾取は、批判的観念としては、「市民体[シテ：引用者注]」の概念に封入された正義の規範と完全に整合的である。それゆえ、不合意を志向する論理と合意を志向する論理という二つの論理が存在するのではなく、同一の規範的な立場から見た世界に対する、二つの視点が存在するのである。搾取の告発は実際、「偉大なものたちの幸福が卑小なものたちの幸福となる」という格率を逆転させたもので、反対に偉大なものたちの幸福をなすのは卑小なものたちの不幸であると主張することで、市民体の公理系の要石となる。」(2013b, p.131)

ボルトンスキーとシャペロの議論においては、まず、人々が搾取を批判する上で、共通世界の存在が前提となる。すなわち、非常に幸福な強者と、悲惨な境遇にある弱者が共通の世界に属し、その間には関係があるということである。これは、搾取に代わって、1980年代以降に広がった「排除」の概念によって薄められてしまった視点である⁹⁾。結局、搾取の告発とは、「ある行為者たちの成功と力が、じつは、少なくとも部分的には、その活動が認知

も評価もされていない他の行為者たちの働きに負って」(pp.109-110) あり、にも関わらず、弱者はその貢献に見合うだけの報酬を得ていないことへの批判なのである。したがって、そうした批判が成立するためには、「偉大な者たちの幸福をなすのは卑小な者たちの不幸である」という強者と弱者のつながりを認識可能とする作業、そして装置の構築が不可欠となる¹⁰⁾。

搾取は通常、何らかの形での強制を前提とするが、資本主義制度のもとでは、「それを覆い隠す一連の迂回路を経由する」(p.129)。第一に、搾取の存在は、行為者間の契約として法的には否定される(「搾取は盗みではない」とするマルクス=ファヴローの言葉を想起されたい)。第二に、搾取は対面での関係を超えたシステムとして成立する特徴を持つ。最大の利益獲得者が、職場で強制力を行使する管理職や経営者ではなく、距離を隔てた株主であるケースを考えてもよい。したがって、搾取の告発には、ロンドンの取引所の部屋でのオペレーターの活動と、アフリカの都市のスラム街で路上生活する子どもの貧困など、「互いを結びつけるのが困難な多数の媒介を含む、非常に長い連鎖」を紡がなくてはならない。

ここにおいて搾取という概念は、科学的法則から導かれる客観的帰結ではなく、一般の人々が不正義を告発するための言語である。コンヴァンション経済学およびプラグマティック社会学が強調するのは、倫理的な価値判断と批判の能力を、研究者のような第三者だけでなくすべてのアクターが有しているということであった¹¹⁾。そして、規範的価値の空間であるシテは、人々の主張の正当化だけではなく、あるべき状態からのズレ(乖離)を認識可能にすることで批判の支えとなる。そして搾取もまた、シテによって認識可能となる。こうして資本主義は、シテの論理に基づいて正当化され再生産されると同時に、批判を通じて変化していくのである(ボルタンスキー=シャペロ 1999)。

搾取を上記のように捉え直すことで、搾取の問題を多様な形態において考察することがで

9) 資本主義への批判に関して、搾取は「社会的批判」の中心的な言語であり続けてきたが、新たな資本主義が出現していく1980年代以降、搾取への関心は後退し、代わりに「持たないという事実」によって、そして社会的紐帯(ネットワーク)の喪失によって特徴付けられる「排除」概念が普及してきた。しかしボルタンスキーとシャペロによれば、排除は階級などの社会構造よりも個人の資質と結びついた概念であり(何らかのハンディキャップを負った個人)、批判概念としては十分ではない。彼らは、排除を搾取と結びつけることで、批判の活性化の方策を探る。フランスにおける排除概念の誕生と普及に関しては、マッソ(2022)が漫画表現を通じて極めて具体的に平明な理解を与えてくれる。

10) シテにおける偉大さの試練を正義へと向かわせ、搾取の証明を支えるような諸装置、とりわけ、利潤形成における貢献の度合いを測定するような会計的な枠組み(装置)の構築がそれである。この論点は、コンヴァンション経済学における量化 quantification 研究と親和的である。また、社会連帯経済など2000年代以降にフランスにおいて実践が進むオルタナティブな経済の模索における、新しい豊かさや社会的効用に関する市民参加型の指標づくりは、価値づけの権力と量化研究の観点からその意味を解釈することが可能である。実際、そこには Jany-Catrice(2012) などコンヴァンション派あるいは近い立場の経済学者が関与している。

11) こうした見方は、合理性の種別からは、ハーバード・サイモンの手続き合理性の前提に対応するものであると言える。コンヴァンション経済学においては、第三者から見た客観的な合理性である実質的合理性は否定され、行為する本人にとって十分に合理的であるかどうか、すなわち手続き合理性が重視される。また、「批判的社会学」に対するラトゥールの批判もあわせて参照されるべきだろう(ラトゥール 2019)。

きるようになる。ボルタンスキーとシャペロによれば、マルクス主義における搾取は、19世紀の資本主義を支えた産業的世界と商業的世界を対象とし、法的に保証された所有の偏差（生産手段の私的所有の有無）に基づくものであった。それに対し、今日の資本主義は、「プロジェクト志向のシテ」によって正当化され、「利潤の実現が活動のネットワーク化を通じて行われる」結合主義的な世界によって特徴付けられる¹²⁾。そこでは、可動的な者——金融市場における資本移動、多国籍企業など——と不動的な者——エンプロイヤビリティを欠く労働者や衰退地域など——の間の、可動性の偏差が搾取の源となる。

3 コンヴァンショナリストによる搾取の再定義と（諸）価値の空間

ファヴローは、かくして、コンヴァンション経済学の研究プログラムに基づく、新たな「価値の空間 V'」とその「価格の空間」との関係を示す（図2）。2000年代の価値づけ研究を踏まえて（Orléan 2011, Eymard-Duvernay 2016, Boltanski et Esquerre 2017）労働価値の空間は規範的な（諸）価値の空間に置き換えられる。

ここでは、価格の空間は、単なる「見かけ」ではなく一つの現実であり、それは「もはや、ブルジョワ経済学が囚われている単なる幻想劇場ではない」（Favereau 2018, p.131）。二つの尺度空間は、同じ論理水準にある。価格の空間が「客観的」な現実であるとするれば、（諸）価値の空間は「間主観的」な現実である。したがって、（諸）価値の空間に依拠する批判（ボルタンスキーとエスケレ）や、そこから明らかになる権力関係（エイマール-デュヴルネ）

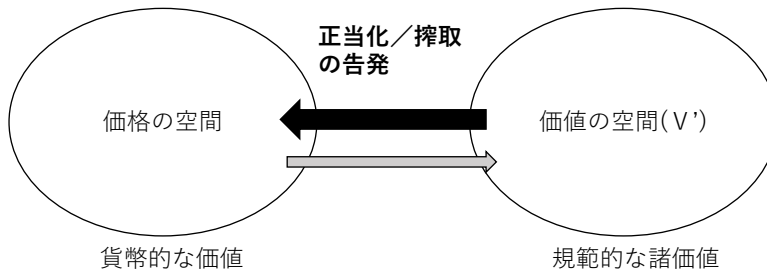


図2 労働価値の空間から規範的（諸）価値の空間へ

出典：Favereau, 2019, « Valeur(s) », exploitation et économie des conventions, presented in Journée « *Etat prédateur, conflits et résistance* » MSH Paris-Nord .

12) 「社会的批判」と対比される1960年代の「芸術的批判」は、フォーディズムの特徴であった官僚制的なヒエラルキーや権威、量産に基づく機械化・合理化・画一化を拒否し、個性、創造性、美の回復と、あらゆる束縛からの解放を志向した。資本主義の第三の精神を構成する「プロジェクト志向のシテ」は、その批判に応じて形成されたとされる。今日、さまざまな場面で、個人がプロジェクトを通じて自由に結びつき創造性を発揮することが求められるが、これはこのシテの「結合主義的」な論理に従うものである。個人の起業、新結合によるイノベーション、デザイン思考の推奨なども同様である。社会ネットワーク論によって描き出されるのは、この世界の論理である。ロナルド・パートの社会関係資本という言葉は、「ネットワーク内で確立された関係が他のものに、とくに金銭へと変換しうる」(p.112) ことを明らかにしている。

もまた「間主観的な」、「もう一つの現実の秩序」なのである (p.131)¹³⁾。

この図式において、価格と価値の関係はいかなるものなのだろうか。これも基本的にはシテ (正当化と批判) の論理から理解される。ここで、ボルタンスキーとエスケレの議論を参照するのが有用である。価値は、価格の上流またはモノ自体の中に定位されるのではなく、あるいは新古典派経済学者のように理論的な均衡価格と混同されるものでもない。経済エージェントがもっぱら関心を払う数値的な現実とは価格であるが、それに対し、価値は「モノの価格を批判 (…) したり正当化 (…) することを可能にする」 (Boltanski et Esquerre 2017, p.111) ものとして定義される。たとえば、形成された付加価値に照らして賃金が不当に安いと (不正義であると) 判断されれば、搾取として告発されることになる。また、価格と価値の関係は一方向的なものではないだろう。「価値—貨幣の空間と、価値—意味の空間との間の複雑な相互関係を考慮しなければならない」 (ベッシー＝ファヴロー 2012, p.575)。

搾取が告発される状況とは、価格も含む複数の価値の間での緊張が激化し顕在化した事態だと考えられる。この点を示すために、ここであらためて、商品の諸価値の間から見た価値づけの過程について、コンヴァンション経済学の知見をもとに整理を試みよう。商品の「質」は、古典的な経済学の用語でいえば、使用価値に相当するといえる。だとすれば、ある特定の使用価値は、それに対応する特定の「質の慣行」に照らして評価されること、質的規定によって成り立つといえるだろう。使用価値は、モノとしての商品の単なる自然的属性ではない。また使用価値は、商品を構成する価値であるから経済的な価値ではあるのだが、一つの商品に一つというわけではなく、多元的である。かつ、そこには質の慣行が、すなわち規範的次元がかかわるがゆえに、経済的価値の範囲に限定されず、非市場的な価値を包含する (Thévenot 2005)。一方、価格は商品の市場的な価値そのものの表示とみなされるので、それを交換価値と呼ぶのが適切であろう (それとともに「価格の慣行」の次元が想定される)。こうして、一つの商品をめぐるでも価値の複数性が存在し、それらの間の緊張が問題となる。ゆえに価値づけの過程においては、異質な価値の妥協や価値の変換、そして正当化が試みられる。まさにここで、価値づけフレームの制定をめぐる諸力、またそのフレームを用いる諸力、すなわち価値づけの権力が作用する。

とりわけ雇用・労働問題において見られるように、主体間の力関係が前面に現れる場合、(正当化の反転としての) 批判がなされる可能性が高まる。正当化や批判はまさにアクターの政治的能力がかかわるのであり、ここで示された新たな二つの尺度空間の関係は、搾取を価値づけの権力の問題として捉え直すことによって理解されるのである。

13) それは、公表される価格のように物的なモノとして「客観的」でもなければ、個人的選好のように「主観的」でもない。ベッシー＝ファヴロー (2011, 2012) も参照。

V おわりに

本稿では、コンヴァンション経済学における価値づけというテーマの展開を明らかにするべく、価値づけ論の概念的要約、価値論の検討、価値づけの権力という概念の導入、搾取概念の再定義について整理をおこなった。

コンヴァンション経済学の観点から価値づけの基本的な契機をまとめると以下の3点に要約することができる。第一に、価値とは価値づけの作業の結果であるが、その作業は、一般的に共有される基準を具体的状況において引照し、解釈し、利用してなされる実践である。第二に、複数の価値基準が存在する。第三に、経済的価値と規範的諸価値という分断は棄却される。コンヴァンション経済学はアクターが有する政治的能力を強調することで、コーディネーション概念を(価値)判断のコーディネーションへと拡張し、規範的な意味での諸価値に重要な位置づけを付与する。とりわけ2000年代以降の研究においては、この観点を発展させることで、価値基準の制定および財や人の価値づけをめぐる権力の所在(「価値づけの権力」)や、労働・分配の問題(搾取)といった政治経済学的な論点を論じるようになっていく。ファヴローやボルタンスキーらの議論が示すように、そこでは、搾取は、(抽象的労働時間で測られる)客観的価値の計算の論理的帰結ではなく、まさにアクターの政治的能力がかかわる正当化や批判の言語として再定義され、また価値づけの権力の問題として捉え直されることになるのである。

これまでのコンヴァンション経済学の展開と同様、価値づけというテーマについても、それぞれ独自の視点を有する研究者たちが、大まかな枠組みは共有しつつそれぞれに議論を進めている。そのため、コンヴァンション経済学の政治経済学としての一側面を描き出すことを試みた本稿の説明も、十分に首尾一貫したものとなっているとは言えない。エイマール・デュヴルネ、ファヴロー、ボルタンスキーについては整合性が高いように見えるが、金融市場を対象としたオルレアンの研究の位置付けなどは慎重な検討も必要である。ANTとの関連などもあわせて、論者ごとの差異に留意しながら理論的な再構成がなされるべきである。また、ファヴローのいう「マクロ」の問題としての「再生産」とは何を意味するのか、そしてこの点とも関わるのだが、価値づけ論の射程を考える上で、それが生産の政治経済学的な分析とどのように接続されうるのか、検討が必要であろう。

(大阪市立大学大学院経営学研究科^a、大阪産業大学経済学部^b)

文 献

- エイマール・デュヴルネ, F. 著, 海老塚明・片岡浩二・須田文明・立見淳哉・横田宏樹訳(2006):『企業の政治経済学—コンヴァンション理論からの展望』ナカニシヤ出版. Eymard-Duvernay, F. (2004): *Economie politique de l'entreprise*. Paris: La Découverte.
- オルレアン, A. 著, 坂口明義訳(2013):『価値の帝国—経済学を再生する』藤原書店. Orléan, A. (2011):

- L'empire de la valeur : refonder l'économie. Paris : Seuil.*
- 瀧澤弘和 (2018) : 『現代経済学』中央公論新社.
- 立見淳哉 (2019) : 『産業集積と制度の地理学—経済調整と価値づけの装置を考える』ナカニシヤ出版.
- ハワード, M.C.・キング, J.E. 著, 振津純雄訳 (1997) : 『マルクス経済学の歴史 (上) —1883 - 1929年』ナカニシヤ出版. Howard, M.C. and King, J.E. (1989) : *A history of Marxian economics, Volume I, 1883-1929*. Princeton: Princeton University Press.
- ハワード, M.C.・キング, J.E. 著, 振津純雄訳 (1998) : 『マルクス経済学の歴史 (下) 1929 - 1990年』ナカニシヤ出版. Howard, M.C. and King, J.E. (1992) : *A history of Marxian economics, Volume II, 1929-1990*. Princeton: Princeton University Press.
- バティフリエ, P. 編, 海老塚明・須田文明監訳 (2006) : 『コンヴァンション理論の射程—政治経済学の復権』昭和堂. Batifoulier, P. ed. (2001): *Théorie des conventions*. Paris: Economica.
- ベッシー, C.・ショーヴァン, P.-M. 著, 立見淳哉・須田文明訳 (2018) : 市場的媒介者の権力, 『季刊経済研究』38 (1・2) : 19-50. Bessy C. and Chauvin P.-M. (2013) : The Power of Market Intermediaries: From Information to Valuation Processes. *Valuation Studies*. 1(1): 83-117.
- ベッシー, C.・ファヴロー, O. 著, 須田文明・山本泰三訳 (2011) : 制度とコンヴァンション経済学 (上), 『四天王寺大学紀要』53 : 451-479. Bessy, C., et Favereau, O. (2003) : Institutions et économie des conventions. *Cahiers d'économie politique*. 44: 119-164.
- ベッシー, C.・ファヴロー, O. 著, 須田文明・山本泰三訳 (2012) : 制度とコンヴァンション経済学 (下), 『四天王寺大学紀要』54 : 567-586. Ibid.
- ボルタンスキー, L.・テヴノー, L. 著, 三浦直希訳 (2007) : 『正当化の理論—偉大さのエコノミー』新曜社. Boltanski, L. and Thévenot, L. (1991) : *De la justification: Les économies de la grandeur*. Paris: Gallimard.
- ボルタンスキー, L.・シャペロ, È. 著, 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉訳 (2013a) : 『資本主義の新たな精神 (上)』ナカニシヤ出版. Boltanski, L. and Chiapello, È. (1999) : *Le nouvel esprit du capitalisme*. Paris: Gallimard.
- ボルタンスキー, L.・シャペロ, È. 著, 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉訳 (2013b) : 『資本主義の新たな精神 (下)』ナカニシヤ出版. Ibid.
- マッソ, A. 著, 川野英二・川野久美子訳 (2022) : 『ホームレス救急隊—フランス「115番通報」物語』花伝社. Massot, A. (2017) : *Chronique du 115*. Steinkis.
- 山本泰三 (2021) : 価値づけと利潤のレント化, 『経済地理学年報』67 (4) : 213-222.
- ラトゥール, B. 著, 伊藤嘉高訳 (2019) : 『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局. Latour, B. (2005) : *Reassembling the social: an introduction to actor-network-theory*. Oxford University Press.
- Boltanski, L. et Esquerre, A. (2017) : *Enrichissement: une critique de la marchandise*. Paris: Gallimard.
- Boyer, R. et Orléan, A. (1991) : Les transformations des conventions salariales, entre théorie et histoire. D'Henry Ford au fordisme. *Revue Economique*. 42(2): 233-272.
- Boyer, R. et Orléan, A. (1994) : Persistance et changement des conventions. Deux modèles simples et quelques illustrations. In A. Orléan ed. *Analyse économique des conventions*, 2e édition. Paris: PUF: 243-271.
- Diaz-Bone, R. (2011) : The methodological standpoint of the "économie des conventions". *Historical Social Research*. 36(4): 43-63.
- Dupuy, J-P., Eymard-Duvernay, F., Favereau, O., Orlean, A., Salais, R. and Thévenot, L. (1989) : Introduction. *Revue Economique: L'économie des conventions*. 40: 141-145.

- Eymard-Duvernay, F. (1989) : Conventions de qualité et formes de coordination. *Revue Economique*. 40(2): 329-359.
- Eymard-Duvernay, F. (2016) : Valorisation : les pouvoirs de valorisation : l'accroissement de la capacité éthique, sociale et politique des acteurs. in P. Batifoulier, F. Bessis, A. Ghirardello, G. De Larquier et D. Remillon éd.s. *Dictionnaire des Conventions*. Villeneuve d'Ascq: Presses Universitaires du Septentrion: 291-295.
- Favereau, O. (2014) : 'Société' par nécessité, 'entreprise' par convention. In B. Segrestin, B. Roger et S. Vernac eds. *L'entreprise, point aveugle du savoir*. Paris : Éditions Sciences Humains : 48-64.
- Favereau, O. (2018) : Valeur (s), exploitation et économie des conventions. *Cahiers d'Économie Politique*. (75): 119-145.
- Heinich, N. (2020) : A Pragmatic Redefinition of Value(s): Toward a General Model of Valuation. *Theory, Culture & Society*. 37(5): 75-94.
- Jany-Catrice, F. (2012) : *La performance totale : nouvel esprit du capitalisme?*. Villeneuve d'Ascq: Presses Universitaires du Septentrion.
- Poulin, E. (1992) : Marx et l'économie des conventions. *Revue Economique*. 43(3): 519-532.
- Salais, R. (1989) : L'analyse économique des conventions du travail. *Revue Economique*, 40(2): 199-240.
- Segura, A. (1995) : Marx et l'économie des conventions : une contribution critique. *Revue Economique*. 46(5): 1361-1373.
- Thévenot, L. (2005) : Certifying the world. In P. Aspers and N. Dodd eds. *Re-imagining economic sociology*. Oxford : Oxford University Press: 195-223.
- Thévenot, L. (2016) : Le pouvoir des conventions. in P. Batifoulier, F. Bessis, A. Ghirardello, G. De Larquier et D. Remillon éd.s. *Dictionnaire des Conventions*. Villeneuve d'Ascq: Presses Universitaires du Septentrion: 203-207.